

研究・調査報告書

報告書番号	担当
8 1	滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門
題名 (原題/訳)	
Alcohol consumption and risk of heart failure in the Physicians' Health Study I. 医師健康調査 I におけるアルコール摂取と心不全の危険度との関連	
執筆者	
Djoussé L, Gaziano JM	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Circulation. 2007 Jan 2;115(1):34-9.	
キーワード	
アルコール、心不全、危険因子、疫学	
要 旨	
<p>背景： 心不全は高齢者の入院理由のトップであり、40 歳以上の成人の 5 分の 1 は生涯のうち一度は心不全を生ずる。中等度飲酒の心不全予防効果についての報告は少なく、一致した見解が得られていない状況である。そこで、本報告は中等度の飲酒と心不全罹患との関連を調べることを目的とした。</p> <p>方法： 医師健康調査 I に参加した 21,601 名を対象とした。対象者は調査開始時点では心不全を認めず、1982 年に飲酒状況についての情報を収集し、2005 年まで追跡した。心不全罹患は各年の追跡調査票で調べ、フラミンガム基準によって確認した。</p> <p>結果： 平均 18.4 年の追跡期間に 904 例の心不全の新規発症を観察した。週間アルコール摂取量が 1 杯未満、1～4 杯、5～7 杯、7 杯を越える群での 10,000 人年あたりの粗罹患率は 25.0、20.0、24.3、20.6 であった。これらの各群で、年齢、BMI、弁膜疾患の既往心不全発症のハザード比 (および 95%信頼区間) は、1.0 (基準群)、0.90 (0.76 - 1.07)、0.84 (0.71 - 0.99)、0.62 (0.41 - 0.96) であり、傾向性の検定の P 値は 0.012 であった。冠動脈疾患の発生を伴わない心不全については、中等度飲酒との間に強い関連は見られなかった。</p> <p>結論： 多量飲酒は避けるべきであるが、この結果からは中等度の飲酒によって心不全の危険度が低下することが示唆される。冠動脈疾患の発生を伴わない心不全との関連がなかったことから、アルコールによる心不全予防効果は冠動脈疾患の発生リスクを低下させることによるのかもしれない。</p>	